



Title	相互作用場面における勢力者の対人認知：行動統制がステレオタイプ化に及ぼす影響
Author(s)	村田, 光二
Citation	
Issue Date	2003-06
Type	Research Paper
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10086/19114
Right	

問題

「地位が人を創る」と言われるが、地位に伴う社会的勢力 (social power) が人の目を曇らすことがある。Fiske (1993) によれば、勢力を持つ者は勢力を持たない者に対して注意を払う必要が少なく、非勢力者独自の特徴を考慮しない傾向がある。また、勢力関係を維持するために、非勢力者を所属するカテゴリーに基づいてステレオタイプの判断しやすい。このようにして勢力者は正確な対人認知ができないというのである。

これまでの研究では社会的勢力として、主として一方向の運命統制 (fate control) の要因を検討してきた (e.g., Goodwin, Gubin, Fiske, & Yzerbyt, 2000)。運命統制とは、他人の成果 (outcome) や報酬に対するコントロール能力のことである (Thibaut & Kelley, 1959)。例えば、会社の上司の査定によって部下の給料が変わるとすれば、上司は部下に対して運命統制できることになる。この概念は過去には、非対称的な結果依存 (outcome dependency) という用語法のもとでも対人認知過程に及ぼす影響が検討されてきた (e.g., Erber & Fiske, 1984)。

しかし、社会的勢力としては行動統制 (behavioral control) もまた考えられる (Thibaut & Kelley, 1959)。行動統制とは、相互作用の相手の行動を左右できるコントロール能力のことである。Stevens & Fiske (2000) の研究は、行動統制の要因を直接扱ったわけではないが、勢力者に対する非勢力者の依存関係を、課題依存と評価依存に分けて、前者においては行動統制の要素が含まれることを指摘している。本研究では、これまで扱われることの少なかった行動統制の要因が、相互作用場面における対人認知過程、特に勢力者が非勢力者をステレオタイプ化する過程に及ぼす影響について、実験社会心理学的検討を行ったものである。

行動統制は、運命統制と同様に、しかし独立した要因として勢力者のステレオタイプ化に影響を及ぼすことを実証的に示すことが本研究の目的である。また、運命統制が影響を及ぼす過程とは異なる、その影響過程について示唆を得ることも併せて目標としたい。

社会的勢力とステレオタイプ化

Fiske (1993) が論じたのは、勢力者 (powerholder; the powerful) は非勢力者 (subordinate; the powerless) に注意を払わない結果、個別の情報ではなく一般的情報、具体的には非勢力者の所属するカテゴリー情報、つまりステレオタイプによって判断しやすいことである。勢力者は非勢力者の結果を左右するが、非勢力者によって結果を左右されることが少ない。したがって、非勢力者に注意を払う必要がない。また勢力者は一般に忙しく多くの情報を処理する必要がある。そのためにある一人の非勢力者の情報に注意を集中することができない。さらに、勢力者は非勢力者を支配したいという動機を持つことがある。勢力者にとっての現状は好都合であって、現状を維持するように動機づけられるために、非勢力者のステレオタイプと一致しない個別情報に注意を払いたくないと思わないだろう。以上のように注意を媒介して、社会的勢力がステレオタイプ化に影響することを示したのである。

以上の議論の理論的背景に、Fiske & Neuberg (1990) の印象形成の連続体モデルがあることは言うまでもない。非勢力者は自分の成果を左右する勢力者を個別化し、それゆえ正確に認知しやすい (e. g. Depret & Fiske, 1999)。他方で、勢力者は連続体の反対の極での対人認知、つまりカテゴリー情報やステレオタイプを利用した認知をしやすいのである。他方で、この議論には経験的背景もあると考えられる。ジェンダーに関するステレオタイプ化に基づく、女性に対する偏見と差別の問題である。Fiske (1993) は、女性への雇用差別に対して企業を訴えた裁判で、専門家として証言する経験の中で、勢力を持つ者が勢力の無い者に対してどのような認識の誤りに陥りがちなのか、身をもって体験したと考えられる (cf., Fiske, Bersoff, Borgida, Deaux, & Heilman, 1991)。

以上の議論を実験で実証した研究の1つが Goodwin, et al., (2000) である。この研究では、対象者の個別情報 (ステレオタイプに一貫しない情報) に期せずして (by default) 注意を払わない側面だけでなく、勢力者が故意に (by design) ステレオタイプに一貫する情報に注意を払う側面を区別して検討している。後者は、現状の社会システムを正当化するためにステレオタイプが役立つ点に注目した議論とも関係する点である (Jost & Banaji, 1994)。

彼女らの実験1では、大学生の実験参加者が、仕事に応募してきた高校生の書類を評価して意見を述べる課題が設定された。この意見は、高校生の雇用決定に、30%の影響力を持つ場合 (勢力あり) と、影響力を持たない場合が比較された^(注1)。参加者は12名の応募者の書類を読んだが、この中で高校生の人種的背景がヨーロッパ系 (アングロサクソン) であるかヒスパニック系であるか、また性格特性が人種的ステレオタイプに一致するか否かも、それぞれ被験者内要因として操作された。そして、書類を読んで評価している間、声を出しながら行うように要請された。この録音された声から、各性格特性に注意を向けた時間を従属変数として測定したのであった。その結果、勢力と情報の種類との交互作用が認められ、勢力者はステレオタイプに一貫しない情報よりも一致する情報に注意を向けやすく、勢力の無い者はむしろ逆の傾向があった。

実験3ではさらに統制条件として、認知者が対象者と無関連な条件を設定して、別の課題で実験を行った。その結果、勢力者のステレオタイプ一致情報への注意の増加は、無関連な者 (統制群) と比べても認められることが明白となった。他方、無関連な者の注意の水準は概して低く、勢力者の不一致情報の無視は非勢力者と比較した時だけに認められることであった。

以上のように、勢力者がステレオタイプ一致情報に注意を払いやすく、非勢力者と比べるとステレオタイプ不一致情報に注意を払わないことが示された。しかし、ステレオタイプ化の所産である対人認知の内容が、予測された通りだったのかどうかは未解明のままである。

勢力者の課題遂行評価

勢力者 (リーダー) の対人認知については、組織研究の分野でも長い間問題とされてきた (cf., 古川, 1988)。会社の社長や重役、大学の学部長や学長といった人たちは、その業績や手腕もさることながら、その人格も高潔であることが一般に期待されている。同時に、部下を見る目があって、的確な評価が可能であることも地位の高い人に求められていることだろう。ところ

が現実の組織を見ると、部下の適性を知らず、部下の心情を把握しないままに部下を使う上司が多いと感じるのではないだろうか。

実際、「権力(power)は腐敗するか？」という題名で有名な Kipnis(1972)の古典的研究では、上司は部下を操作の対象として見がちであり、部下の業績を低く評価しやすい傾向が認められた。近年のメタ分析を用いたレビューでも、組織の上司が勢力を持つほど、部下の遂行成績の評価を下げる事が認められている(Georgesesen & Harris, 1998)。他方で、自己の成績評価はより肯定的になった。

これらの研究は、勢力者が実際に非勢力者を否定的に、多くの場合ステレオタイプに沿った方向で認知しやすいことを実証している。この点で、ステレオタイプ化の所産についての実証が乏しい Fiske たちの研究を補うものとも考えられる。しかし、ここでの否定的評価はステレオタイプ化の認知的所産というよりは、高勢力者の自己正当化など、動機づけ的過程の所産である可能性が高い。

本研究では、以下に述べる行動統制の要因を主たる研究テーマとしている。しかし、これまでの研究と同様に運命統制の要因も検討する。その理由の1つは、行動統制が運命統制と独立に影響を及ぼすことを示したいからである。しかし他の理由は、勢力を持ったことの影響が、ステレオタイプ化の所産である対人認知にまで影響を及ぼす証拠を示したいからである。

行動統制と対人認知

すでに述べたように、Fiskeたちの研究では勢力を、他者の結果をコントロールできる程度、つまり運命統制と定義して実証研究を積み重ねている。しかし、社会的勢力の定義はそうたやすくなく、Deret & Fiske (1993)も認めており、個人に勢力を帰属させるより、社会構造あるいは社会的相互依存性の特徴として勢力をとらえることを模索している。現実に社会的勢力が働く場面を考えても、上司が部下に命令するにしろ、指導教官が大学院生にアドバイスをするにしろ、何らかの行動が伴い、その行動によって非勢力者の行動が変わることがしばしばある。勢力に伴う行動統制の側面を検討することもまた、必要なのではないだろうか。

Thibaut & Kelley(1959)はゲーム理論的表現を援用して、相互依存関係のモデルを提出した。運命統制もその中の重要な概念の一つであるが、同時に行動統制も概念化した。彼らの概念化は多くの場合、相互的な関係として示されるが、ここでは一方的な形で図式化した。次のページの図1が、行為者Aが行為者Bに対して一方的な運命統制を持つ場合である。他方、図2が、行為者Aが行為者Bに対して一方的な行動統制を持つ場合である。運命統制の場合、対角線右上の欄の記号で示されるBの成果は、Aの選択行動によって一義的に決定される。AがCを選択すればBの成果は「+」となり、Dを選択すると「-」となる。しかし、Aの成果はBの選択に左右されない。他方、行動統制の場合は、Bが自分の行動をAの行動に応じて代えることによって、自分の成果が最終的に決定する。AがCを選択した場合にはXを選択し、Dを選択した場合にはYを選択すれば自分の成果を「+」に保てるのである。

以上の概念化で明らかなことの一つは、行動統制もまた他者の成果に影響を及ぼすことを通じて、相手の行動を統制していることである。相手側の選択行動にも依存して、相手の成果は

		Bの選択	
		X	Y
A C の 選 択	C	+	+
	D	-	-

図1 運命統制の図示表現

		Bの選択	
		X	Y
A C の 選 択	C	+	-
	D	-	+

図2 行動統制の図示表現

「+」になるか「-」になるかは決まってくる。しかし、自分の選択行動が成果に部分的な、統計的用語を用いれば交互作用的、影響を持つことは確かである。この意味で、社会的勢力の問題を考えると、運命統制と別個に概念化して扱うことに意味があるかどうかは疑う研究者もいるかもしれない。しかし、勢力がステレオタイプ化を導くという問題を考えたときに、次の点から重要な要因として運命統制と別個に検討する必要があるのではないだろうか。

それは、行動統制という勢力の行使が、他者の行動への注意およびその欠如と深く関わっている点である。勢力は注意（の欠如）を通じてステレオタイプ化に影響することが論じられている（Fiske, 1993）。相互作用場面では自らの行動調整(regulation)のために資源が奪われ、他者の行動を解釈する際の認知資源が減少する問題が知られている（e.g., Gilbert, Krull, &

Pelham, 1988)。行動統制者はそれゆえ、他者の個別行動への注意を怠り、カテゴリ情報に基づくステレオタイプの判断に陥りやすいかもしれない^(注2)。

しかし他方で、行動統制の帰結は、他者の行動を観察するまではわからない。ここが運命統制とは異なる。そうすると、他者の行動へ注意を払う動機づけは高まる可能性が考えられる。また同時に、自己の行動へも注意が向く可能性もある。さらに、自己の行動と他者の行動との対応関係に注意が向きやすくなるかもしれない。図2では、行動統制をまったく一方的なものとして示した。しかし現実には行動統制は、影響関係がたとえ非対称であったとしても、相互的であることが大部分である。上司は部下の行動に応じて、自らの仕事を調整せざる得ないだろう。こういった場合には、勢力者も相手に注意を払いやすく、条件によってはステレオタイプ化と反対の個別化を推進する可能性もあるだろう。

本研究ではこの最後の、行動統制がある場合にむしろステレオタイプ化が減少する問題までは実験的な検討ができなかった。しかし、ここまで論じたように、また現実の相互作用場面を考慮した場合にも、行動統制を取り上げて、ステレオタイプ化に及ぼす影響を検討することは意義があると考えられる。

研究代表者の過去の研究

以上の基本的な考えに基づいて本研究者はこれまでも、行動統制がステレオタイプ化に、広くは対人認知過程に及ぼす影響について検討してきた。

村田(1997a)では、2人の作業者に指示する勢力保持者(監督者)と、この状況を記録する観察者からなる4人の実験集団を構成して、監督者が観察者よりも大学と知的能力に関するステレオタイプに沿った印象を形成するのかどうかを検討した。その結果、監督者、記録者とも概してステレオタイプの判断を行わず、この操作が成功していないことが認められた。したがって、仮説そのものも支持されなかったが、監督者の認知には光背効果が認められ、勢力を実際に行使する者は、相手を単純化して認知しやすいことが示唆された。

Murata(1997b)では、「文系」または「理系」のステレオタイプを付与されたおよび「されない」3人の作業者に対する、実験参加者(学生)の対人認知が検討された。実験参加者の1名は作業者の報酬を分配可能で、運命統制力を持つマネージャーの役割が割り当てられた。もう1名にはディレクターの役割が割り当てられ、作業者の課題選択に指示を出すという形で行動統制力を持った。実験は、社会的勢力が大きい場合と小さい場合のいずれかで実施された。

その結果、仮説通りに、勢力が大きい条件の方が小さい条件よりも、作業者をステレオタイプに沿って認知しやすかったことが一部の指標で示された。同じ作業成績だった学生についても、「文系」ステレオタイプを付与された者は言語能力が高く、「理系」ステレオタイプを付与された者は数理能力が高いと見なされたのである。同時に、仮説通りに、マネージャーの方がディレクターよりも作業者をステレオタイプ化しやすいことも別の指標で示された。

しかし、行動統制の要因の独立した影響は示されなかった。また、勢力の大きさの要因は運命統制力の大きさによって操作されたため、運命統制・行動統制という要因と勢力との大小が直行していない実験となってしまう、結果の解釈に困難な部分が生じている。そして、指標間

の結果の違いも残っている。

本研究の仮説と実験デザイン

以上の研究を背景として、本研究では行動統制がステレオタイプ化に及ぼす影響を検討したい。行動統制がある場合には無い場合よりも、対象人物への注意を払いにくく、ステレオタイプに依存した他者認知をしやすいと考えられる。本研究では注意などの媒介過程の問題を検討するのではなく、次の運命統制の場合と同様に、ステレオタイプの所産としての対人認知を測定して検討したい。

運命統制もこれまでの研究に示されたように、ステレオタイプ化を促進するだろう。運命統制の有る場合には無い場合よりも、ステレオタイプに依存して、個別情報が示す内容から隔たった対人認知をしやすいと考えられる。本研究では以上の仮説を次のような実験状況で検討したい。

実験参加者として大学生を用い、その大学生の能力に関わるステレオタイプを用いるつもりである。具体的には数学能力の高低に関するステレオタイプを用いたい。日本の大学生は「文系」「理系」という大別がなされやすく、そのカテゴリーに応じて理数系の科目が「苦手である」あるいは「得意である」と思われやすい。日本の大学生を認知する際に広く用いられているこのようなステレオタイプを利用しようと考えた。そして、このステレオタイプに反して、数学パズルで好成績あるいは低成績をとった対象人物(解答者)を目撃できる場面を設定して、その能力をどう認知するのか、測定することにした。

このとき実験参加者を、解答者に数学パズルを出題する立場に置くことにした。この立場(位置)は、解答者の行動や運命を左右する立場として好都合である。出題者には、行動統制が有る(あるいは無い)条件を設定し、それと独立に運命統制が有る(あるいは無い)条件も設定して、実験を行うことにした。出題者は、いずれかの統制力を持っている場合には、解答者に対して高勢力者である。しかし、いずれも持っていない場合には必ずしも高勢力者とは言えないので、ここでは出題者の立場をまとめて「高地位(high status)者」と呼びたい。出題者の位置(position)は、正解を知っている、解答者の行動を少なくとも促す力を持つという点で、統制力が特に無い場合でも、少なくとも地位は上だと考えられるからである。これに対して解答者は低地位者と捉えられる。

実験1、2では数学能力が低いというステレオタイプがあると考えられる、ある文系の大学の学生を対象として、そこに所属する学生が数学パズルで好成績を取った状況を設定した。実験参加者もその大学の学生とした。実験1は、行動統制(有り・無し)および運命統制(有り・無し)を独立変数として各2水準に操作した、 2×2 の要因配置デザインで実施された。すべて実験参加者間の要因である。実験2も同じデザインで、実験1の手続を改良して実施した、追試にあたるものである。

実験3は、逆に、数学能力が高いというステレオタイプがあると考えられる、ある理系の大学の学生を対象として、そこに所属する学生が数学パズルで低成績を取った状況を設定した。実験参加者は、その大学を知っている他の大学の学生とした。実験3では、行動統制の要因を

実験 1、2 とは別の形式で操作して、この要因の効果のみを検討した。具体的には、出題者と同じ立場にいるが、直接には出題をしない役割を集団の中に置くことによって操作した。集団内には探索的に第 3 番目の役割も設定して、一要因 3 水準の実験デザインとした。集団を単位として実験を実施することになるので、この要因は実験参加者内要因として扱った。

(注 1) もう 1 つの実験条件として、責任感 (平等的価値) をプライムされるかどうかにも操作されたが、ここでは説明を割愛した (2 章 (注 3) 参照)。

(注 2) この議論はステレオタイプがすでに活性化していることが前提である。